

【第2回】 日本中医学会 漢方応用講座
(日本中医学会とクラシエ薬品(株)共催)

老中医・路志正先生の症例を学ぶ

——目の乾燥と膈の灼熱感を伴う乾燥——

解説者：路京華先生

レポート：岸 奈治郎（平成日高クリニック 和漢診療部）

日時：2012年9月8日開催

【症 例】 39歳女性

【主 訴】 6年前から続く 1) 目の乾燥 2) 膈の灼熱感を伴う乾燥

【現病歴】 6年前に家庭不和があり、そのときの気脳鬱積、暴怒、驚恐、煩躁不安があつてから症状が出現してきた。

目の乾燥と膈の灼熱感を伴う乾燥感を訴えて受診した。

【現 症】 発病前は辛いものが好物だった。

よくイライラする。

冬の寒さに弱い。

口が渇くが水は欲しがらない。

睡眠が浅く、よく目が覚める。熟眠感が無いが、毎晩6時間程度寝ている。

食欲正常。

小腹部に詰まって張っている感じがする。

大便是1回/日。

冷たいものを食べると、胃の調子が悪くなり下痢をする。

滋陰清熱剤を使うと便の形にならず、2回/日に増える。

尿は黄色。尿道の違和感と熱感もある。

月経の周期は正常。乳房の強い張りを伴う。量が少なく、2日間で終わる。経血は熱く、そのときは小便も熱い。

膈粘膜はピンク色。

疏肝理気、益精養血剤を使うと、目の乾燥・熱感はある程度改善するが、膈の乾燥・灼熱間は変わらない。

【診察所見】

舌：舌質=淡、胖大。舌苔=乾燥した薄白苔が付着し割れている。舌根部では微黄苔。舌尖に瘀斑を認める。

脈：沈弦細数

【考察】目の乾燥——肝は目に開竅する。肝陰虚、肝血虚。(赤字はすべて執筆者の岸奈治郎先生)

膈の灼熱感を伴う乾燥——腎は二穴に開竅する。腎由来の症状と考えられる。

愁訴には尿道の違和感と熱感を伴っている——腎は二穴に開竅する。下焦の熱。

口が渴くが水は欲しがらない——瘀血、陰虚

睡眠が浅く、よく目が覚める。熟眠感が無いが、毎晩6時間程度寝ている。——肝血虚、心血虚

月経の周期は正常。乳房の強い張りを伴う。——肝気鬱結

量が少なく、2日間で終わる——血虚

経血は熱く、そのときは小便も熱い——熱

膈粘膜はピンク色——?

小腹部に詰まって張っている感じがする——?

発病前は辛いものが好物だった。食欲正常——胃熱。陰を傷つけていた経歴。

尿は黄色——熱

大便は1回/日。

冷たいものを食べると、胃の調子が悪くなり下痢をする——脾陽虚。

滋陰清熱剤を使うと便の形にならず、2回/日に増える——脾虚

よくイライラする——肝気鬱結、肝風内動

冬の寒さに弱い——陽虚

疏肝理気、益精養血剤を使うと、目の乾燥・熱感はある程度改善するが、膈の乾燥・灼熱間は変わらない——膈は腎が開竅している。腎の乾燥、腎陰虚が考えられる。

6年前に家庭不和があり、そのときの気脳鬱積、暴怒、驚恐、煩躁不安によって発病したようだ——きっかけとしては五志化火。肝気鬱結、肝鬱偏熱により陰を傷つけた。肝陰虚を生じ肝陽上亢。長期間の肝陰虚によって腎陰も消耗されたために膈の乾燥が出現するようになってきた。

【病性】裏熱虚実錯雑

【病勢】正虚邪実

【病位】肝腎

【病邪】気滞・気逆 陰虚

【弁証】精虧血少、燥熱傷津、竅機燥涸、雷火上騰、兼挟胃弱

【治法】 平肝斂陽、填精養血、滋陰潤竅、和胃護中

【処方】 天麻釣藤飲合二至丸加減 加 杞菊地黄丸 加味保和丸

釣藤 15 天麻 10 菊花 10 金蟬花 12
桂白芍 15 炒蒺藜 12 僵蚕 10 丹参 15
旱蓮草 12 女貞子 15 枸杞子 15 制首烏 12
川懷牛膝各 15 炒白朮 15 草叩仁 10 新会皮 10
阿膠烱化 6

上記の湯薬に下記を追加している。

杞菊地黄丸 12g 2×

加味保和丸 1丸 1×

〈参考〉

天麻釣藤飲 (『雑病証治新義』)

石決明 4.0 釣藤鈎 3.0 天麻 2.0 牛膝 2.0
桑寄生 3.0 杜仲 3.0 益母草 3.0 夜交藤 3.0
茯苓 3.0 黄芩 1.0 山梔子 1.0

【効能】 平肝熄風・清熱安神・補益肝腎

【主治】 肝陽上亢・肝風内動

天麻、釣藤鈎、石決明……平肝熄風

山梔子・黄芩……清熱瀉火

夜交藤・茯苓……安神寧心

牛膝……引血下降

益母草……活血利水

杜仲・桑寄生・牛膝……補益肝腎・滋陰柔肝

二至丸 (『医方集解』)

旱蓮草、女貞子 各等量

【効能】 補腎養肝

【主治】 肝腎陰虚

旱蓮草は夏至に、女貞子は冬至に収穫するためこの名が付いた。

旱蓮草……養陰益精・涼血

女貞子……滋腎養肝・明目

杞菊地黄丸 (『医級』)

地黄 牡丹皮 山薬 山茱萸 茯苓 沢瀉 枸杞子 菊花

——六味丸加枸杞子菊花

【効能】 滋腎養肝・明目

加味保和丸 保和丸 (『丹溪心法』)

山楂子 神麴 半夏 茯苓 陳皮 連翹 萊服子

(医級では麦芽を加える)

[効能] 消食和胃

[主治] 食積

——加味逍遙散 3包 3× 六味丸 2包寝る前 (これは私、岸が考えたエキス剤治療のときの処方例です)

【解 説】

辛いものが好きだったり、よくイライラしたりする様な性格で、肝気鬱結したり胃熱がこもりやすく、陰を消耗する性質だった。

6年前にとっても強いストレスがかかった。怒りは肝が主るため五志化火となった。今まで陰を消耗しやすかった性格がより肝陰を傷つけてしまった結果、腎陰にまで影響が及び肝腎陰虚の状態になった。肝腎陰虚により肝陽上亢、肝陽化風となっている。イライラするというのは、火が上炎している症状である。

目や膈の乾燥感は陰虚による症状と、邪熱による乾燥症状とも考えられる。また肝風内動のため脾胃を横逆し、冷たいものを食べると下痢をするような脾虚の症状が起こっている。

上記から、治療については平肝熄風、滋養肝腎を主に治療を行う。

路志正先生は下記のように分析しています。

眼干而熱、陰道干熱疼痛、經来血熱、小便發熱、陰道粘膜粉紅、俱是熱象。

目は熱で乾き、膈は熱のために痛み、月経血は熱く、排尿時も熱く、膈粘膜は紅く、これらは熱証を表している。

且心中煩躁、難眠易醒、經前乳房發脹、亦是肝鬱氣滯、鬱而化熱之証。

そして心中煩躁し眠りにくく目覚めやすく、月経前は乳房が張る。これらは肝鬱氣滯による鬱熱の証である。

路老認為：此熱非可清之熱、仍燥化之熱、清之必害胃、傷陰化燥。

路志正先生師がおっしゃるには、この熱は清熱の熱ではなくて、燥が化熱した熱である。

したがって清熱すると必ず胃を害し、傷陰してますます化燥させてしまう。

其冬天怕冷，吃凉东西则胃中不舒而腹瀉，服滋陰清熱劑則便不成形、排便次數增加、重要的是舌質淡、有齒痕，故不可妄投苦寒清熱之劑。

これは冬の寒いときに冷たいものを食べると胃が受け付けず下痢をし、滋陰清熱剤を飲むと便の形が無くなり排便回数が増える。舌質が淡で歯痕があるということは重要で、それゆえに(熱の証があるからと言って)苦寒清熱剤は使いにくい。

其熱、系平素酷喜辛辣傷陰之品、又加暴怒、內經雲「暴喜傷陽、暴怒傷陰」。

この熱は普段から辛くて傷陰しやすいものを好んで食べていたところへ暴怒が加わり、黄帝

内経で言われている「喜びすぎると陽を傷つけ、怒り過ぎると陰を傷つける」と言う状態になっている。

且鬱氣積久傷陰化燥、燥為陰邪、可隨寒、隨熱而化、久積鬱怒、則肝腎龍雷之火騰浮暴張於外、失其相位、而洞虛其内、不能温化三焦、行其生理之職使氣化陰精、反致心君上煩、

腎燥下流、肝旺脾虛、化源内竭、燥氣横生。

そして鬱熱が蓄積して時間が経つと陰を乾燥させる。燥は陰邪であり寒や熱を伴って変化する。久しく蓄積した怒りによる鬱は肝腎龍雷之火となり沸騰して外に暴張し、ほんらいの場所から離れると、元のところが空虚になるため、三焦を温化できなくなり、生理の力によって陰精を氣化することもできなくなる。そのため反って邪が心君に上煩し、腎燥が下流するため、肝旺脾虚をきたし、化源が内竭して、燥氣がますます横溢してしまう。

今水虧血虚失濡、精、血、津三者俱少、而下竅粘膜失其潤養、上下竅机乾澀、枯木少榮、肝用反急、煩而躁生、擾及神明不安、心浮神燥、陽不入陰則夜難熟寐。

今、水虧血虚のため潤いが無くなり、精・血・津液とも減少し腎の竅である膻は潤いがなくなった。肝の竅である目も腎の竅である膻も乾燥してしまい枯渇して榮養が少なくなった。肝用反急、乾燥により煩躁となって神明不安となり、心浮神燥、陽は陰に入らず、夜熟眠できなくなった。

不用參、著恐助肝逆亢氣、唯用白朮固実脾胃、

人参と黄耆は肝逆亢氣を助長してしまう恐れがあるので、脾胃を補うのに白朮を使った。

加草叩仁、新会皮、辛香走氣、使方滋而不膩

辛くて香りが強い草叩仁、新会皮を足して氣をめぐらし滋陰して湿が滞らないようにした。

路老重視脾胃升降、強調欲伏其所主、而先其所因、

路志正先生は脾胃の升降（脾氣は精微を肺に昇ぼらせ、胃氣は降濁を主る）を重要視し、患者の体が欲するところを強調して、原因となる所をまず治療する。

須知常達變、治病求本、必細察疾病之本質、而不迷於表象。

常態を熟知すれば変化に対応することができる。病を治するときには本を追究すべきだ。このことをよくわきまえるべきだ。疾病の本質を細かく観察して、表象に惑わされてはならない。

《医宗必読・腎為先天本脾為後天本論》

「腎は先天の氣を主り、脾は後天の氣を主る」

見痰休治痰、見血休治血、

痰を見て痰を治療するのであってはならない。また血を見て血を治療するのであってはならない。

無汗不発汗、有熱莫攻熱、喘生毋耗氣、

無汗の患者を発汗させず、有熱の患者に熱で攻めず、喘息の患者の気を消耗させるな。
精遺勿洩泄、明得各中趣、方為医中傑”。

遺精の患者は排泄を洩らせ、それぞれの症状の的を得る、それが優れた医者というものだ。